

弘法大師空海によって体系的な密教が日本にもたらされて以来、真言宗は天竺・唐に由緒を求めながら社会的基盤を確立し、教相（教義の修学）と事相（教義に基づく実践）を軸として発展を遂げていった。東寺観智院杲宝が撰述した「我慢鈔」には、真言宗は東寺を中軸とし、醍醐寺・仁和寺がそれを支える形で公家の護持や鎮護国家の祈禱を担ってきたとの記述がある。本報告では特に、天竺・唐に対する意識が、「日本」を舞台とする事相の展開や、東寺・醍醐寺・仁和寺を柱とする真言宗教団のあり方にいかなる影響を及ぼしたのか、検討を試みたい。

第一章では、真言宗僧が「日本」という根本的な条件をどのように意識していたのか、成尊撰「真言付法纂要鈔」に基づいて考察する。朝廷に撰進された本書には、弘法大師の功績に基づき、真言宗の優れた点として「十種殊勝」が挙げられている。天竺や唐からの系譜を強調しつつ記された「十種殊勝」の内容から、「日本」の位置づけを明らかにする。第二章では、その後の真言宗が「十種殊勝」をふまえつつ、いかなる枠組みのもとで宗教的活動を展開していったのか、「東要記」をもとに検討する。「日本」では、①天竺・唐からの系譜を象徴する「空間」、②聖俗両社会の紐帯としての「修法」、③「公家」との関係性を軸として、事相重視の活動が展開された。①では東寺・神泉苑・宮中真言院を、②では後七日御修法・祈雨法・孔雀経法を、③では伝法灌頂・結縁灌頂をとりあげ、天竺・唐における密教と国家の関係性が、「日本」においていかに再現されたのかを辿る。

第三章では、天竺・唐に做った宗教的活動の形が、真言宗教団のあり方にいかに影響を及ぼしたのかを考える。杲宝が「我慢鈔」に示した東寺・醍醐寺・仁和寺の関係性は、公家による統制を受けて形成されたものではない。では、天竺や唐を意識しながら宗教的活動が展開されていく中で、これらの三寺は各々どのような立ち位置や役割を志向し、真言宗を牽引するに至ったのであろうか。そこで、まずは東寺固有の役割について、「三十帖策子」など弘法大師請来品を安置する空間であることや、東寺長者と法務の兼任といった事象に注目しながら検討する。次に、真言密教の嫡流としての立場や公家との関係性にこだわった醍醐寺・仁和寺側の思惑や動向について探る。

以上のように、日本という条件のもとで展開された宗教的活動の骨格を反映して形作られた真言宗教団のあり方について、歴史的な観点から跡づけていくこととしたい。